

アルジェのイタリア女

2022/09/08



いま、NHKの木曜講座では、ロッシーニ(1792-1868)の《アルジェのイタリア女》を見えています。1813年にヴェネツィアのサン・ベネデット劇場で初演されたこのオペラは、ロッシーニがまだ21歳のときの作品。依頼からわずか一ヶ月で仕上げました。ロッシーニお得意の抱腹絶倒の喜劇的オペラです。歌も音楽も丁寧につくられていて、十分に長く聴き応えがあります。彼の代表作の《セヴィーリアの理髪師》よりも人気があるほどで、天才ロッシーニの面目躍如たるものがあります。

アルジェリアとアルジェ:舞台の時代 | 16世紀

ただ、オペラの舞台はアフリカのアルジェリア。アルジェは、北アフリカに大きな領土をもつアルジェリアの首都で、ヨーロッパの人たちには歴史的にも充分によく知られています。残念ながら、あまり日本人にはおなじみがない国名なので、いまひとつ人気が出ません。そこで、いましばらく、アルジェとアルジェリアについてお話ししましょう。

このアルジェリアも、アラブ人やベルベル人が先祖代々の土地を受け継ぎながら生活していましたが、16世紀に入ると東からはオスマン帝国が侵入し、西からはスペイン帝国がやって来ました。1533年に、アルジェを根拠地とし

ていた海賊バルバロッサがオスマン帝国の宗主権を受け入れました。オスマン帝国の治下ではトルコ人による支配体制が築かれたので、アルジェの「デイ」(統治者:ムスタファ)は、沿岸のキリスト教国の船をバルバリア海賊を率いて襲撃して権威をほしいままにしていました。このロッシーニの《アルジェのイタリア女》はこの時代のころのお話で、恐いもの知らずの、この海賊の首領デイが、若いイタリア娘に、散々、とっちめられる痛快な物語です。見方によっては、このトルコ人のムスタファの宗教や生活様式を徹底してからかう「人種差別」だと思われるようなところが数多くでてきます。女好きで大きなハーレムを持ち、イスラム教徒なので(表向きは)お酒は飲めず、平気で人の首は切り落とし、そのくせに、名誉と地位には固執するトルコ人です。でも、この手の風刺オペラや演劇に付きものの、他国を使って自国のイタリア社会を批判する手法なので、あえて目くじら立てるにはおよびません。



このいま見ているシュヴェツィンゲン音楽祭のミハエル・ハンペの演出では、最後の船出のシーンでイタリアの三色旗が意気揚々とはためきます。でも、この三色旗は、1848年のイタリアの独立革命から、イタリア王国が建国される1861年にかけてのイタリア統一運動(リソルジメント)の中で自由と独立を求める運動のシンボルとなったもので、このオペラの舞台となった17世紀は元より、初演された1813年にはまだ三色旗はありません。時代錯誤です。

初演の時代 1813年以降

このロッシーニのオペラ《アルジェのイタリア女》が初演されたのは、なんと、1813年です。ワーグナーとヴェルディが生まれた年です。19世紀になると、1830年にフランスの王政を復古したシャルル10世は、王政に対する民衆の不満をそらすために海外派兵を考えました。アルジェリアは地中海を挟んだフランスの対岸に位置していたので、アルジェリアに出兵してアルジェを占領し、植民地にしました。フランスは、主な都市をフランス本土と同等の扱いにしたので、フランス人をはじめ、多くのヨーロッパ人がフランス領アルジェリアに入植しました。アルジェリアはフランス帝国を支える植民地として重視され、植民地支配は強化されました。その状況は第二帝政が1870年に倒れて第三共和政になっても変わらず、第二次世界大戦の時期までつづ

きました。彼らは、現地のアラブ人やベルベル人を低賃金で雇って大農園などを経営しました。「コロン」といわれたその子孫たちは富裕層を形成しました。アルジェを舞台とした小説『異邦人』を書いたノーベル賞受賞作家のアルベール・カミュは、アルジェリアで生まれ、アルジェで育ったこの「コロン」の出身者です。首都アルジェの中心部は、フランス人居住区でパリ風の高級店舗が並び、郊外には「カスバ」といわれる現地人たちの貧民窟が広がるという格差が次第に大きくなっていきました。いずれ、問題は起きます。

アルジェリア戦争：近現代

その後ながらくフランス人の入植者の支配がつづきましたが、第二次世界大戦後の1954年に「民族解放戦線」(FLN)が武装蜂起し、激しい独立運動が始まり、ついにフランスとの間に「アルジェリア戦争」(1954-1962)が起きました。フランス人入植者は「フランス人のアルジェリア」を唱え、当局もアラブ人の独立運動を厳しく弾圧したので、双方のテロ活動が繰り返されました。アルジェリア独立戦争が激化する中、フランス政府がアルジェリア問題に苦慮して、次第に独立承認に傾くと、当然のことながら、家や財産をアルジェリアに持っていた現地のフランス人入植者は強く反発しました。1958年には現地フランス軍が反乱を起こしました。フランス政府は50万の軍隊を投入して、身方のフランス軍に過酷な弾圧を加えました。それが、かえってフランス系の民衆をFLNへ結集させることになりました。制御できなくなったフランスの第四共和政政府が倒れると、植民地支配の危機を救うため、第二次世界大戦の救国の英雄ド＝ゴールがフランス国民の期待を担って復活し、アルジェリア問題の解決にあたりました。しかしド＝ゴールは大統領に当選し強力な権限を与えられると一転して態度を変えて、「アルジェリア人のアルジェリア」を実現させる方針をとりました。これでは、解決になりません。ド＝ゴールは、フランスの軍隊によって、現地軍(フランス側)の反乱を抑え、1960年にはアルジェリアの独立の可否を国民投票にかけ、賛成多数の支持を受けて解放戦線との交渉を開始し、そして1962年、停戦と独立を内容とするエビアン協定を成立させました。晴れて、アルジェリアは独立を達成して「アルジェリア民主人民共和国」となりました。割を食ったのは、長くからアルジェリアの発展に貢献したフランス人系の「コロン」たちとアルジェリアに出征したフランスの若者たちです。

シェルブールの雨傘

この8月に、NHKの特集番組「世界サブカルチャー史 欲望の系譜」(全8回)が再放送されました。「サブカルチャー」とは傍流の文化のことで、映画やポップスや流行や社会風俗をいいます。この映像には、戦後1950年代から2010年代までの、当時の映画が沢山出てきます。特に、「フランス興亡の1960年代」(第8巻)では、映画「シェルブールの雨傘」(1964)が登場します。ド・ゴールと「アルジェリア戦争」がテーマになっていて、その時代のフランスの若者たちの生き方が美しくも悲しく描かれています。最後はハッピー・エンディングで終わります。この善人ばかりの映画には、悪人は一人も出てきません。いえ、二人登場します。戦争と税金です。(笑い)[都築正道]